

# やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	20 / 2006 / 26-31
タイトル	野木和公園雑感
著者名	柿崎敬一

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

## 野木和公園雑感

第10代 柿崎 敬一

### はじめに

1994年5月、東奥日報の月曜随感コラムに「公園今昔」というタイトルで野木和公園について原稿依頼され、掲載されたことがある。これは野木和公園の移り変わりとその公園保全に関わるボランティア活動について簡単に紹介したものであった。

今回、青森市が本格的に市民公園として整備を進め、これが完了してから10年を経過し、およそ60年前から身近な遊び場としてきた野木和公園やその周辺の変わり様について書いてみた。小学生のころ、春はフナ釣りから始まり花見、夏はギス(キリギリス)、セミ取り、秋にはヤマブドウやアケビ、クリの収穫、冬は当時湖上に積もった雪をきれいにはぎ取って天然氷の採取を行っていたのでスケートリンクのような状態となっており作業員の居ないすきを見てスケートをしたり、近くの山でスキー遊びをしたものであった。

交通の便も良く、旧来の植物が残存し、遊歩道や休憩所、トイレなどが整備されており自然観察のフィールドとして広く利用すべきであろう。

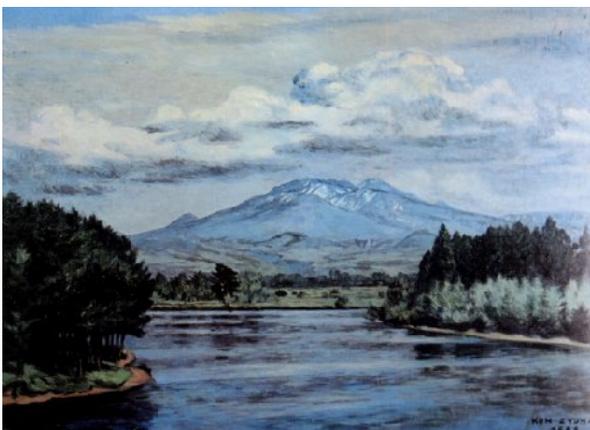
### 野木和公園とその周辺

油川の西方約2kmの丘陵地に位置し、野木和公園をはじめ、縄文時代やそれ以降の遺跡、油川城址、板野堤と油川の地名由来に関連するとされる鶴ヶ峰、八十八ヶ所霊場、青森市文化財(天然記念物)のシナイモツゴの棲息する又八沼など多くの池沼や旧跡がある。

一帯はアカマツ、コナラ、ミズナラ時にはブナと混交する林となっていたが大方は伐採され、スギやカラマツの植林地、畑地として開発されたが一部沢通りなどには旧来の植生が残存し「里山」となっている。

野木和公園は合浦公園と共に桜の名所で、4月下旬から5月初旬かけて青森春まつりの会場としてオリエンテーリングをはじめとする数々のイベントが開催され5万人を超える花見客で賑わう。

野木和公園は、総面積33.6haで周囲約4km、面積13.3haの水田灌漑用の野木和湖とこの周



[写真1] 野木和公園より八甲田山を望む。今純三、1938年(県立郷土館「日本近代銅版画と今純三展」図録より)



[写真2] 野木和公園より八甲田山を望む。現在(2004年6月16日)

圃に広がる植樹された桜類、松などやコナラ、ミズナラ、カシワ、クリ、トチノキといった旧来から残る樹木からなる林、草原(地)で構成されている。

初めてソメイヨシノ(桜)が植樹されたのは 1922 年(大正 11 年)で 500 本、その後 1935 年(昭和 10 年)に 200 本が追加植樹されたと伝えられている。

1938 年(昭和 13 年)、青森県出身で日本近代銅版画の先駆者である今純三画伯がこの公園から Y 字形の雪形を表す八甲田山を描いている。

## 植物調査

1971 年(昭和 46 年)に初歩的な植物調査ではあるが、生徒自らの手で自然の中に飛び込んで野木和公園の植物を調べることは自然保護思想の啓蒙になるものと考え、油川中学校の全校生徒約 600 名による植相、植生調査を実施した。

当時、公園として利用されていた部分は後述する現在の「ピクニック広場」が中心であった。調査地はこの部分及び対岸の「林間散策園②」、又八沼南岸に設定した。

調査内容はピクニック広場に生育する木本の種類と胸高直径の計測、対岸では植物社会学的手法(ベルトランセクト)で湖岸からの距離に対応して変化する植物の種類(優占種)の把握、又八沼では生育する植物の採集分類であった。この結果、ソメイヨシノは 263 本で直径は最大 50cm、アカマツは 313 本、最大直径 55cm で、数値の分散状況からアカマツは植物遷移によってススキ草原から自然に発生したものと考えられ、ソメイヨシノは径 10cm 前後と 30cm 前後の二つの山を持つ分布曲線が描かれることから植樹が数回行われたことを示している。ほかに、木本としてスギ、カラマツ、カエデ(モミジ)数本が記録された。対岸の林間散策園②の一角は当時、馬の飼料を収穫するための採草地となっており夏～秋にススキやワラビなどの刈り取りがなされてきれいな草地が出現したものであった。生育する植物の種類は、水生植物を除き孢子植物 5 種のほか種子植物 63 種を数えることができた。今では目にすることができなくなったオキナグサ、湿地にはノウルシやトキソウ、モ



[写真3] 野木和湖と湖上大橋(2002 年4月19日)

ウセンゴケ、ミミカキグサなどの貴重な植物も記録されている。植物社会学的に見た場合湖岸から丘に向かって変遷する植物は立地によって異なり、アゼスゲ→ヒメシダ→ゼンマイ→ワラビ→ウシノシッパイ→ヒライ、アゼスゲ→ウシノシッパイ→クマヤナギ→フジ→ゼンマイ→タニウツギなど数個のパターンが認められた。これは中学生による植物調査であるが、これまでこのような調査が行われた記憶はなく、野木和公園に関する一つの基礎資料となり得よう。

## 野木和湖

季節によって水位が変動するが春の満水時には水深およそ 5m に達し、底質は厚く堆積した 1m を越す泥である。セキショウモやイバラモ、ヒシ、ヒツジグサなどの水生植物が生育している。

また、フナをはじめコイ、ナマズ、ウナギ、ワカサギ、シナイモツゴなどの魚類が棲息するがいずれも激減傾向にあり、フナ釣りの際、小さな口で餌に食いついて釣れてくるため嫌われ者扱いされ、ヌマ

チカと呼ばれていたシナイモツゴは今ではその姿を見ることができなくなった。近年、ライギョやソウギョ、ブラックバスなどの外来魚が密放流され生態系に大きな打撃を与えていることは確実視されている。

戦前、コイは、湖の一部を仕切って養殖されていたと伝えられているがその後この囲いが破損し、湖全体にひろがってしまい自由に繁殖を繰り返して個体数も増えた様子であった。

油川町の観光協会が主催して数年おきに「コイ取り大会」なるイベントを開催していた。1978年(昭和53年)、県立郷土館の「淡水魚展」に展示する資料(魚)を収集するためこれに立ち会ったことがある。

水を落とした湖には、津軽地方一円から多くの参加者を迎え、採取の条件として個人、グループを問わず網を一つ使用(網の形式は自由、但し地引き網は除く)することであった。観光協会では地引き網をかけたが泥や水草のため網が広がらずまくれて太い綱状になって殆ど使い物にならなかった。公園近くにあった自動車整備学校の生徒たちはバレーボールのネットを持って入り、50cmを超えるコイを数匹ゲットして優勝した。泥の中に潜むコイも網の目が大きく、ワイヤーの入ったネットには勝てなかったようである。これ以降、大会は開かれていない。

1981年(昭和56年)頃までは冬季、氷に穴をあけて大形のワカサギ釣りをする光景が見られたが、今では全く姿を消してしまった。一方、ヘラブナは1981年から1992年(平成4年)に亘り、日本へらぶな釣り研究会青森支部が関西、四国方面から取り寄せて放流したことから春から秋にかけて多くの釣り人が訪れている。また、毎年春まつり期間中に「野木和湖魚釣り大会」が開催され、フナのほかに体長30cmを超すブラックバスが釣れているが、フナなどの仔魚は減少しているようである。

## 又八沼

野木和公園の南方約300mにはジュンサイの生育していた水田灌漑用の又八沼という小さな沼で1993年(平成5年)、青森県を北限とし、環境庁のRDBでは絶滅危惧I B類となっている10cm程の淡水魚シナイモツゴの棲息が確認された。2000年(平成12年)8月、ブラックバスなどの外来種混入による食害が懸念されたことから、この沼の水を抜いて外来種を駆除し、この時採集したシナイモツゴ約1,000匹を沼に返した。しかし、この時沼に生育していたジュンサイをはじめヒツジグサやヒシなどの水生植物も刈り取ったことから環境が一変したようである。2000年10月、「又八沼に生息するシナイモツゴ」として青森市文化財(天然記念物)に指定され、管理団体として「シナイモツゴを守る会」が結成された。生息調査や環境整備、巡回パトロールなど本種保護のための活動を定期的に行っている。現在、ここにはシナイモツゴのほかフナ、ドジョウ、ウキゴリなどの魚類が棲息



[写真4] 又八沼(2002年5月28日)

[写真5] 又八沼のシナイモツゴ(2005年10月7日)

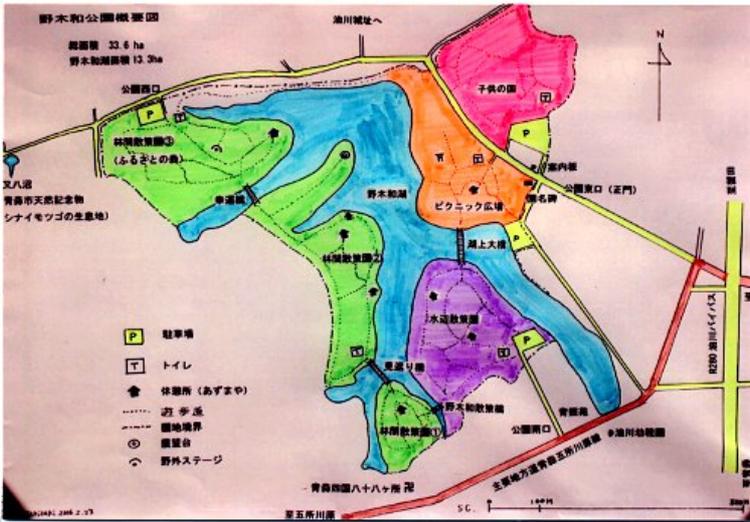
している。

### 野木和公園の整備

野木和湖は国有地であり、園地は種々の経緯を経て、1939年(昭和14年)油川町が青森市に合併したことにより青森市が管理することとなった。当初の園地は今のピクニック広場が中心で、これを

野木和湖の周辺一帯に拡張し、市民公園として本格的な整備が始まったのは1973年(昭和48年)以降のことである。

ピクニック広場、子供の国、水辺散策園、林間散策園(①～③ふるさとの森)の4エリアに区分され、子供の国を除く3エリアは湖上大橋、野木和散策橋、見返り橋、幸運橋の4架橋で連結している。駐車場のほか、各区画には遊歩道や休憩所(あずまや、ベンチ)、トイレ、水飲み場などの設備が整えられている。



[写真6] 野木和公園概略図



[写真7] ピクニック広場(2004年6月16日)

### ピクニック広場

広さ3.2haの古くから園地として利用されてきたエリアで、合浦公園と共に青森春まつりの野木和公園会場となる。植栽されたソメイヨシノの古木やシダレザクラなどの桜類、アカマツが主な樹種となっており、湖岸にはハンノキやヤナギ類が生育し20種程の木本を数えることができる。林床はシバなどの草地となっている。



[写真8] 子供の国(2004年4月29日)

### 子供の国

園内を通る車道の北側にありこの道に沿って旧来よりソメイヨシノが植栽され、アカマツと混生する林となっていたが、これに加えて元青森県自動車学校の跡地を含めた広さ4.1haのエリアとして整備された。滑り台やぶらんこ、ジャングルジムなどの遊具が置かれ、広い草地の広場があり子供達の遊び場となっている。桜類やナナカマド、シラカバなど多種の植樹が見られ、特に東側の民有地との

境界にはメタセコイアが大きく育っている。

## 水辺散策園

ピクニック広場から長さ 92m の湖上大橋を渡ると東、西、北の三方が湖水に面する 3.4ha のエリアである。一帯は芝生で覆われるがサクラ類やツツジ類、ハナミズキ、トドマツ、メタセコイア、カラマツが植えられ、旧来から生育していたアカマツ、コナラ、ミズナラ、カシワ、アオダモやスギなどの樹木が残る。



[写真9] 水辺散策園(2004年6月16日)

## 林間散策園

水辺散策園の南西端から長さ 21m の野木和散策橋を渡ると 3 つのエリアから構成される林間散策園となる。

第一は林間散策園①で、面積 1.1ha、南方をクマイザサとスギ林からなる民有地に接しバを張り付けた草地となっており、一部にスギが残されているがサクラ類が植樹され、湿地にはアヤメ、キシヨウブなどのハナショウブ類も植えられている。シダ類やコケ類も多く見られる。一方、ブタナやヒメジヨンの外来種も侵入している。概して新しく造成された園地の感がある。



[写真10] 野木和散策橋(2004年6月16日)

第二は林間散策園②で、長さ 72m の見返り橋で結ばれている。面積 2.7ha、このエリアの北に位置する半島状の部分はアカマツが生育し、一部カラマツの植林が行われて従来のミスナラ、コナラ、コシアブラ、イタヤカエデなどの混生する林となっているが、南半部は昭和 40 年代ころまでは採草地として利用されていたが、農耕が馬から耕耘機に変わり植林も行われず放置されたことから植物遷移の法則にしたがって現在にいたっている。この部分は公園整備に当たって新たな植樹などをせず遊歩道とトイレ、休憩所を整備した状態であり、野木和公園周辺の植物遷移を観察するには極めて興味ある場所の一つである。現状はアカマツやカラマツ、ミズナラ、コナラ、ハリギリ、トチノキ、シナノキ、カシワ、ヤマグワ、タニウツギ、ノリウツギ、ヤナギ類、オオバヤシャブシ、オオバクロモジ、ヤマウル



[写真11] 見返り橋と林間散策園②(2004年6月16日)



[写真12] 対岸より見た林間散策園②と展望台(2004年4月29日)



[写真13] 幸運橋(2004年9月15日)



[写真14] 林間散策園③(ふるさとの森)

シ、ツタウルシなどが生育し、これにヤマブドウやミツバアケビ、クズなどのつる性の植物が巻き付き、ササ類も侵入してジャングルの様相を呈しており、今後の遷移に注目したい。

第三は、林間散策園③で、面積 4.9ha、71m の幸運橋で林間散策園②と連結する。このエリアは、1965 年(昭和 40 年)ころ、生えていた樹木を伐採して、表土まで剥ぎ取られていたが、その後放置されススキ草原、さらにアカマツの実生から若いアカマツ林となっていた。当時のアカマツが散在し、広く芝生が張り付けられ、さらに 1985 年(昭和 60 年)から 1988 年にかけてオオヤマザクラやソメイヨシノ、ケヤキ、ツバキ、トドマツ、ニセアカシア、ブナ、カシワ、シラカバ、クロマツ、サルスベリ、サツキ、ツツジなど約 6,000 本が市民の手で植栽されたことからこのエリアは「ふるさとの森」とも呼ばれている。

これまで野木和公園の歴史的な背景やここに至るまでの経緯など「雑感」として述べてきたのである

が、市民は利用目的によって子供の遊び場や運動場として、高齢者のゲートボールやグランドゴルフの競技場として、或いは散策や自然観察の場として活用している。

文部科学省が提唱する「こどもの居場所づくり」推進事業に推薦された「元気町油川子ども教室」ではこの公園を会場として植物観察やどんぐり拾いをし、これを利用したおもちゃ作り、木々の名前を当てるクイズなどを実施している。

一方、公園利用者からは草がのびて困るとか、ハチに刺されたとか、毛虫がいるとか、クマがでた(2002年6月;目撃情報)とか自然界ではごく当たり前の事象でも苦情として寄せられる。人手の加わった自然はそれなりに「人」による管理が必要であり、造りっぱなしでは「藪」となってしまう。植樹の種類にしても現存するものを最優先に捉えるべきで外来種の持ち込みは慎むべきであろう。行政と市民がこの問題に積極的に取り組み、多様な自然環境に恵まれた野木和公園の保全を強く望むものである。

(March, 2006)